

吹屋の民家

— 片山恵資家 —

ふきや

吹屋というところ

岡山県川上郡成羽(なりわ)町大字吹屋は岡山県西部を流れる高梁(たかはし)川の支流、成羽川をさかのぼった海拔550m、岡山から車で約2時間の高原にある。国道180号線より山に入り走ること1時間、こつ然として吹屋の集落が出現する。成羽地方は三畳紀の標準化石が多く発見された所であり、中世より高瀬舟による交通が発達しており、川上に徳治2年(1307)の年紀のある船路開通の碑(国指定)が残っていたり、平安時代の太刀(国指定)や中世古文書が民家に伝世しているなど早くからひらけていた地方である。

吹屋はその名のように銅の生産と関係があった。平城天皇の大同2年(807)に開抗されたといわれているが確証はない。平安時代に備中は長門、豊前について銅の生産国であった。それがどこで採掘されたかははっきりしないが、吹屋が中心であったと推定するほかはない。また室町

時代にも備中の守護が銅を明に輸出して利をはかった記録がある。慶長5年(1600)小堀正次が代官として松山城(高梁市)にはいり遠州が継ぐ。このころは小堀代官の支配下にあった。延宝8年(1680)2月、住友友信が吉岡銅山の稼行を幕府へ出願し最初の鉱山事業に着手するが、多額の運上金、そのうえ大量の湧水に予期以上の困難にあい経営は成功とはいえなかった。元禄3年(1690)別子銅山を発見、いらい別子に重点をおくようになり、元禄11年まで稼行し正徳3年(1713)12月吉岡銅山を返上している。その後、地元の豪商大塚氏が60年間にわたり苦心の経営の結果大量の銅を生産している。その後、長尾佐助氏の手に移り幕末まで続く。明治6年(1873)12月岩崎弥太郎氏(三菱)が稼業権を引きつぎ創業したが明治57年ごろを頂点として次第に衰え昭和7年休山した。のち帝国開発会社・吉岡鉱業所などが操業したけれども昭和47年閉山してしまった。

べんがら

弁柄のこと

銅とともに忘れてならないものに弁柄がある。吹屋で弁柄がつくられたのは宝永4年(1707)といわれる。原料である緑礬(ろうは)を偶然の機会から発見したのがはじまりで西江、谷本両氏により宝暦11年(1761)9月本山鉱山が開抗され生産がはじめられた。文政のころ広兼氏も加わり、のち片山・長尾・柳井・田村氏などにより生産・販売されこれにより巨富をえた家もあり、いまま残る広兼・西江邸のとりでのような豪壮雄大な構えをみれば当時の繁栄がしのばれる。吹屋は幕末から明治にかけては銅よりも弁柄の町として著名であった。しかしこれらの経営者はぼう大な不動産その他営業外の収入が多か →

中部落の一部

町並はゆるやかな斜路の両がわに並び、よく保存された家の多いところ。



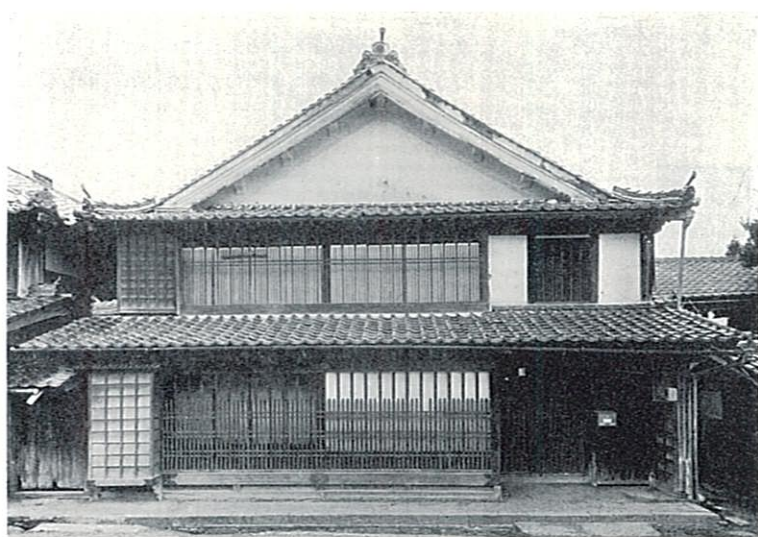
→ ったため経営の合理化を考えず旧体いぜんの生産法であったのと山間の不便な立地条件であったことなどによって近代的工場の弁柄に押されしだいに衰退していった。しかし大工場で生産された純度の高いものよりもすべて手仕事でつくられた吹屋弁柄にある何ものかが大切な役割をはたすことがわかり吹屋弁柄を求める声が多くなったと聞いている。

吹屋のまち

町並はゆるやかな坂道の両がわにならび、6つの部落からなっている。戸数123戸、人口340人、現存する民家50戸、そのうち保存状態のよいものは15戸くらい、しかし他はしだいに改造され近代化されつつある。江戸末期から明治にかけて建てられたものが多く全体としてよく保存されており用材、つくりも立派で往時の繁栄をしのばせる。屋敷は短冊状に奥ふかくて妻入りの家がおおく、様式も南部のものとも異り石州大工の特長といえるものがみられる。瓦はすべて「棧がわらぶき」で石州瓦を用いてある。前面には格子を多く使ってあり弁柄でぬったあとがある。

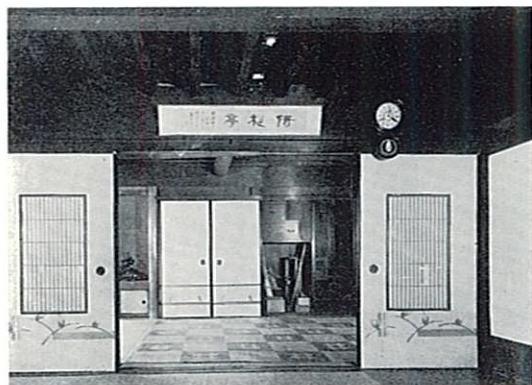
片山恵資家

ここに紹介する片山家住宅は屋号を胡屋（えびすや）、通称を角片山といい弁柄製造の総本家片山浅治郎家の分家として明治12年に建てられたものであり、典型的な町家としての形態をよくとどめている。



片山家前面

妻入り、屋根は石州瓦を用いた棧がわらぶき、やゝ目の荒い格子を多用してあり重厚なうちに端整瀟洒（しょうしゃ）な感じをあたえる。



ミセドマよりミセオクをみる

ミセノマ、ミセオクは根太天井としミセオクにハコダンをつけ2階に通じる、「さしがもい」や「ねだ」もしっかりしており寸分のくるいもない。

間口5間、奥行16間、吹屋では中位の大きさである。町家の定型ともいえる「通りニワ」をもち母屋の裏にミソグラと土蔵を配し母屋に採光のため中庭をとっている。

1階は「みせのま」「みせおく」「ざしき」「だいどころ」「いま」などからなり、2階は「いま」「女中部屋」「なんど」など6室ある。基礎は附近からでる割石をならべ、土台と外がわの柱はすべてクリ他はマツ、「しきい」「えん」はサクラを使っている。店のドマにはこの地方で

法曾石（ほうそいし）といわれる厚さ10cmくらいの偏平な石をしきつめている。階段はるか所にあり、いずれも箱段になっている。「通りニワ」のものは女中専用、台所のものは道具のあげおろしに用いられたものであろう。

同家を調査中土蔵2階梁上に4枚の板絵を発見、その1枚に

「島根県官下 石見国那賀郡
第一大区小拾六区
浅利村大工棟梁 島田綱吉
明治十二年卯三月三十日」

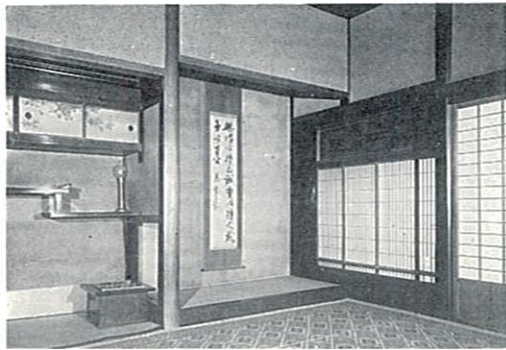
という墨書があった。この板絵の番付は廻り番付と組合番付を混用しているが廻り番付のつけ方が不規則であり、石州大工の特長と考えてよいかどうか今後の調査、考察にまたねばならない。

（森田） 写真 山崎治雄氏



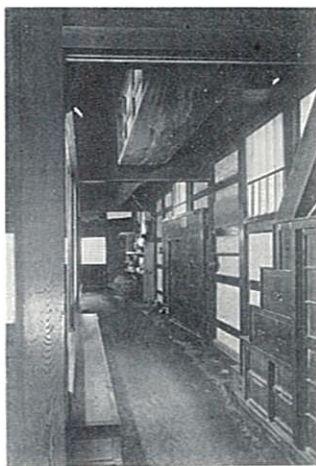
ミセオクより中庭をへて
ブツマ（仏間）、ザシキ
をみる

ミセオク、ブツマ、イマへの採光のため中庭をとり、全体に変化と安らぎをあたえている。



ザシキ

付書院の天板、妻板、トコカマチなどうるしべんがらを塗り美しく仕上げている。



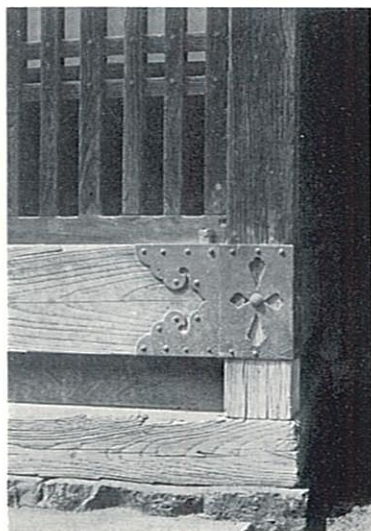
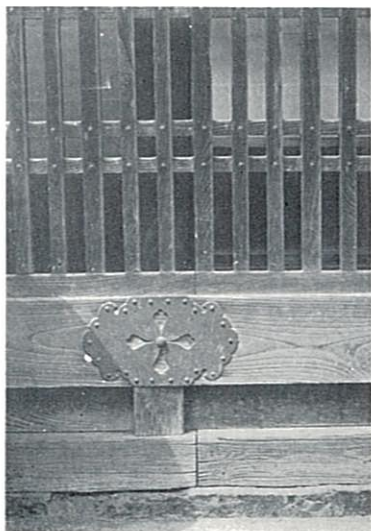
ミセドマより通りニワを
みる

町屋の特長である通りニワに改善のあとがある。家人は左側の上りカマチを使い、使用人は右のハコダンから2階へあがる。中間に開閉するスドを設け天井にツリトダナをつける。隣家との間に路地があるので窓をとり明るい。



通り庭より台所をみる

台所は吹抜になっており煙出し（吹屋ではハフとよぶ）がある右すみの鉄製のカマドは餅つき、ミソづくりなどのほか大量の湯をわかすとき使う。

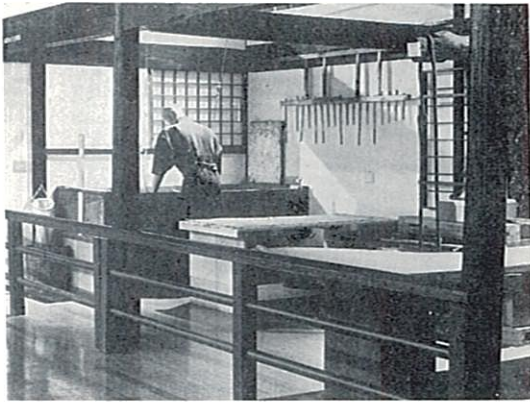


カマチの
飾り金具

伝統の産業と手仕事をたずねて

—— 特別展「民具」——

(昭和50年10月7日～11月16日)



特別展会場の一部 紙漉き場

50年度には特別展として、県内で古くからみられた手仕事や産業をとりあげた。

私達の祖先の、それぞれの時代のくらしのなかで使われた道具の意味を考え、あわせてめまぐるしく移り変わる現代のくらしを反省するきっかけになればと思い、山仕事、蘭草と花筵、木地・塗り・漆、鋳物、塩、弁柄、和船、鉄砲台、和紙をとりあげて、その歴史、道具、製品などを展示した。

なお会期中の10月11日(土)の午後1時から、本館講堂において、哲西町の賀島飛左さんの民話と、立教大学教授、宮本馨太郎氏の「くらしのうつりかわりと民具」と題する記念講演会を開催した。(竹林)

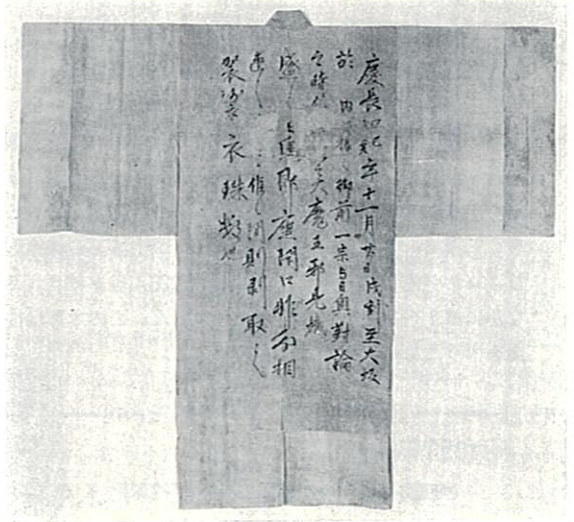
「日蓮宗不受不施派の歴史展」を終わって

日蓮宗不受不施派とは、江戸時代を通じて禁教となっていた日蓮宗の一派のことである。文禄3年(1594)、天下を統一した豊臣秀吉は、京都方広寺で千僧供養を行った。京都妙覚寺にいた仏性院日奥は、「不信の者(謗法)の施を受けず、また不信の神仏への参詣、不信の僧への布施

を行わない」という不受不施の思想を貫き、権力への迎合を拒否した。不受不施派に対する弾圧はこの時から始まる。

岡山県の南部、備前地方は、中世以来日蓮宗の教線の強く及んだ所であった。南北朝時代大覚大僧正の布教に始まり、戦国時代に至って「備前法華」と呼ばれる信徒の層が形成された。江戸時代の禁制下にあっても、その信仰は脈々と受け継がれ、今日に至っている。

明治9年(1876)に再興されて、100年目に当るので、本館ではこの小展覧会を開催したのである。この展覧会の主題は、「不受不施派」展ではなく、「不受不施派の歴史」展である。単なる教義の説明ではなく、備前や美作の民衆が、どのように教えを受けとめ、弾圧に抗してどのように信仰を守っていったかに焦点を当てて展示を行った。従来、宗教に関する展示は、それが生み出した聖教・遺物の美術的側面にのみ光を当てる展示が一般的で、その宗教とかわりを持つ人々の動向については看過される傾向にあった。本館の今回の展示では、近世封建制の統制の中で信仰が民衆とどのように係わり合い、続けられて来た →



日奥の袈裟衣 妙覚寺蔵

慶長4年(1599)、大阪城において、徳川家康の面前で、日奥と受不施派の日紹が対論し、陰謀によって日奥の敗北と判定され、そのとき着ていた袈裟衣を奪われた。「仏法之大魔王、邪見熾盛之日奥」の文字がみえる。

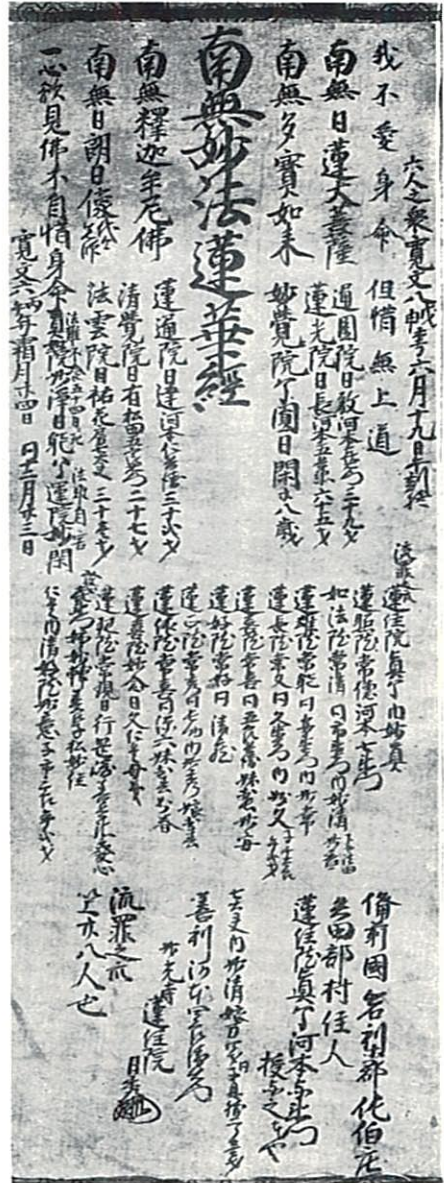
→ かを主張の一つとした。

日蓮宗不受不施の流れを汲むものとして、不受不施派、不受不施講門派、久米右衛門派、日蓮派などが、今日まで伝えられている。特に後二者は、江戸時代の内信の伝統を受け継ぐ派で、未だ秘密信仰的な要素が強い。今回は、金川妙覚寺を本山とする 不受不施派の 資料を中心に展示した。その点で、宗門の内側から見た歴史展示になり、日蓮宗全体からの、また支配者による宗教統制上からの観点がやや欠けることになった。

展示資料の多くは、妙覚寺や妙善寺の宝蔵に収蔵されている、日奥をはじめ関係僧侶の遺品（主として本尊・書簡類）である。これらは県内にありながら、ほとんど公開されたことの無いものである。今回の展示によって、それらの資料的価値が改めて認識されるとともに新資料の発見も幾つかあった。（例えば日領自筆の身池対論記録など）また千葉県側の資料が大量に公開されたことは、不受不施派研究史上においても最初のことであり、特筆すべきことであつたと言えよう。岡山と並んで千葉県は不受不施派根拠地の一つであり、不受不施派を研究する上で、見落してはならない地域である。

最後に御協力くださった各位に感謝いたします。（三好）

寛文の法難は、備前では藩主池田光政による寛文 6 (1666) 年からの徹底的な弾圧として現れた。（備前心学法難）領民に儒教を強制した光政は、仏教のなかでも特に不受不施派に集中攻撃を加えた。僧侶に対して還俗・退去が勧告され、拒否すればあらゆる迫害が及んだ。佐伯本久寺の日閑は、追放の身で布教した罪で、同9年信徒5人とともに岡山下城下の柳原刑場で斬首された（佐伯六人衆）。また関係者28人も追放された。そのなかには1～2歳の幼児も含まれていた。この本尊は彼等の菩提を弔うために作成されたものである。



日秀本尊 妙覚寺蔵

昭和51年度特別展

(仮題) 「近代科学をひらいた人々

— 岡山の洋学者 —」

昭和51年10月6日(水)～11月14日(日)

岡山県には、江戸時代に多くの洋学者が生まれている。そのうち宇田川・箕作両家を中心とした美作の洋学、児玉順蔵・難波抱節などによる備前の洋学、緒方洪庵の医学、古川古松軒の地理学をとりあげ、彼らが近代科学の発展につくした足跡を掘りおこして、展示したいと考えている。

岡山県立博物館だより No. 8

発行日 昭和51年3月20日
 発行者 岡山県立博物館
 館長 村井董直
 岡山市後楽園1-5
 TEL(岡山)72-1148